

일본음악교육학회 제9회 음악교육세미나 일한합동세미나

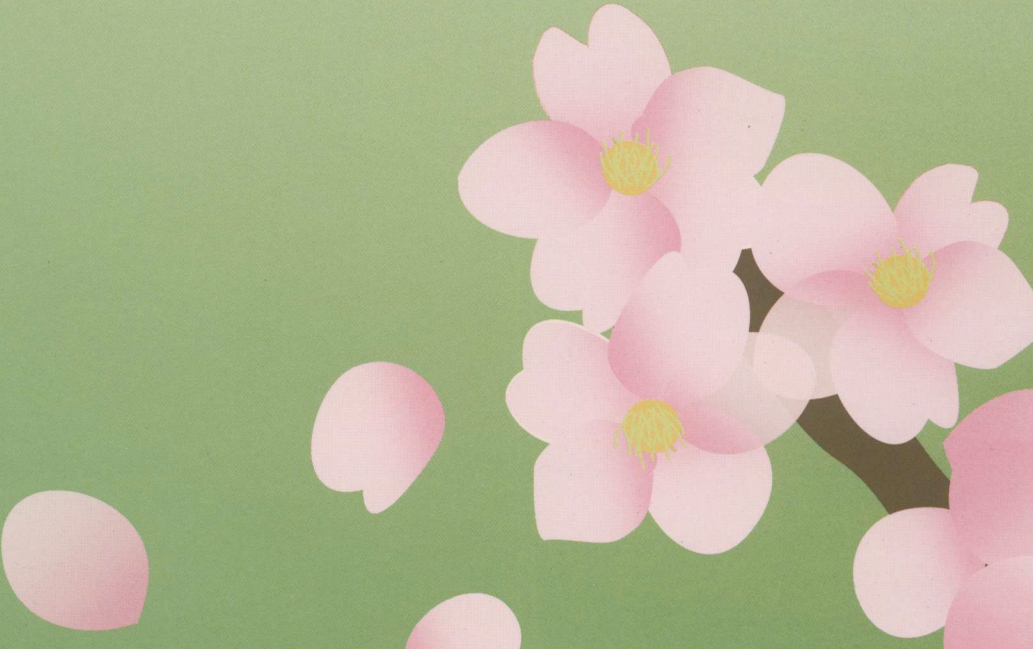
일한양국의 음악교육 이론과 실천

— 전통음악을 중심으로 —

第9回日本音楽教育学会ゼミナール 日韓合同ゼミナール報告書

日韓両国の音楽教育の理論と実践

— 전통音樂に着目して —



日韓近代音楽の相互関係*

☆ 安田寛・ヘルマン・ゴチェフスキ・趙泳培
総合司会・通訳 植村幸生**

American music was the common basis not only for the modern music of Japan, but also for that of Korea. What were the commonalities and differences between Japanese modern music and Korean modern music, both of which were commonly strongly influenced by American music, especially American hymn tunes? How are these historical backgrounds reflected in the music education of today? Our round table deals with these topics from multiple viewpoints.

Yasuda's conclusion is that Hawaiian and Micronesian hymn books have a lot of tunes in common with Japanese and Korean hymn books.

Gottschewski compares Japanese and Korean variants of an originally English song in 6/8 meter. While the Japanese versions preserve the up-beat from the English original, the Korean tend to eliminate it. Japanese people also tend to eliminate up-beats in duple, but not in triple meter. The similarities in eliminating up-beats might be related to similarities in the language structure, and the differences may derive from differences in the traditional music cultures of both countries.

Cho addresses the different approaches to education and social organization in traditional music education, and how they reflect different cultural assumptions in the two countries.

1. アジア太平洋全体との関係から見た讃美歌による日韓近代音楽の西洋化の過程

安田寛

日韓の近代音楽の西洋化を比較する場合、安田はアジア太平洋の近代音楽の西洋化を一つのプロセスとして見て、日韓近代音楽の西洋化をこのプロセスの一過程、一部分として見る。

このような見方をするようになったそもそもの動機は、日韓近代音楽史を比較しようとするとき避けて通れない植民地問題であった。これはもちろん無視できない重要な問題であるが、反面、これにあまり捕らわれ過ぎると、日韓の関係を見るのに窮屈になり、ある捕らわれたものの見方に固定されてしまわないか、ということであった。

さて、アジア太平洋近代音楽の西洋化というプロセスを推進した最大の原動力はキリスト教宣教による讃美歌の伝播だった、というのが私の考えである。讃美歌の伝播による音楽の西洋化というプロセスを体験した地域はその後、共通の問題を抱えることになる。伝統音楽をどうするか、という問題である。この共通した問題には共通した解決法がないことがこの問題の特徴の一つのように見える。

私の関心は、アジア太平洋地域の音楽が西洋化したプロセスが各地でどのように進化したか、共通点は何か、相違点は何か、共通であったり、相違していたりした原因は何か、といったことにある。また各地の影響関係はどうなっているのか、にある。

* Cultural Relationship between Japanese and Korean Modern Music

** 安田寛 (奈良教育大学 YASUDA, Hiroshi (Nara University of Education))

ヘルマン・ゴチェフスキ (東京大学) GOTTSCHESKI, Hermann (The University of Tokyo)

趙泳培 (済州教育大学) CHO, Young-Bae (Jeju National University of Education)

植村幸生 (総合司会・通訳) (東京芸術大学) UEMURA, Yukio (Tokyo National University of Fine Arts and Music)

これを見るための方法として、私は各地の讃美歌(曲)を比較することにした。この方法と結果について、今日は特に日韓関係に焦点を当ててみる。日韓近代音楽の西洋化の過程の相互関係が、普通見られているように、日韓だけに限られるものではなく、実は、アジア太平洋の各地で進行した過程に密に関係しているという面を見てみたい。

地域としては、韓国、日本、ハワイ、ミクロネシア、ポリネシアを取り出す。そうした理由の説明はここでは省略する。

ざっと見ても、地域によって伝わった讃美歌にかなりの違いを見ることが出来る。その原因は以下にあると思われる。

- 1) 伝わった年代(したがって底本となったアメリカやイギリスの讃美歌集が相違している)の違い
- 2) 伝道団の違い(カトリックかプロテスタントか、プロテスタントもイギリスかアメリカかドイツか)
- 3) 教派の違い(プロテスタントではメソジストか、長老派か、組合派かなど)

繰り返すが、日韓近代音楽の西洋化の過程の相互関係が、アジア太平洋の各地で進行した過程に密に関係しているという面を見るための方法は次のようなものである。

- 1) まず、日韓で共通する讃美歌を選び出す。
- 2) 次に、選び出した讃美歌が他のどの地域と共通するかを見る。

そうすると、

- 1) まず日韓だけに共通する讃美歌がある(K Jと表記)
- 2) 他の一地域と共通する讃美歌がある(ハワイと共通するものはK J Hと表記。同じくK J M(ミクロネシアと共通)、K J P(ポリネシアと共通))
- 3) 他の2地域と共通する讃美歌がある(K J H M, K J H P, K J M P)
- 4) 最後に全地域に共通する讃美歌がある(K J H M P)

それぞれに占める割合は次のようになった。この割合によって日韓に共通する讃美歌はミクロネシアとハワイと共通するものが多いことが分かる。これに比べるとポリネシアの讃美歌との関係が薄いことも分かる。

K J	32%
K J M	27%
K J H M	22%
K J H	12%
K J M P	3%
K J H M P	2%
K J H P	1%
K J P	1%

さらに日韓だけに共通する讃美歌が32%で、他の地域と共通するものが68%あり、ざっと日韓に共通する讃美歌全体の約7割の讃美歌が他の地域と共通するものである。

比較するためのデータベースをさらに充実すること、データの精度を高めること、さらに他のいろいろな関係を見なければならぬ、という作業が残っているが、それらを差し引いても、讃美歌によって引き起こされた日韓近代音楽の西洋化の過程の相互関係が、アジア太平洋の各地で進行した過程に密に関係していたことがかなりの確率で予測出来ると私は考えている。

最後に、日韓だけに共通する讃美歌が全体の3割を占めているということは、他にも日本の讃美歌にはなく、韓国、ハワイ、ポリネシアに共通する讃美歌がかなりあるというようなことを考え合わせると、ゴチェフスキが提示した、日本と韓国とでそれぞれ独自の西洋化があった、という面も今後詳細に検討する必要があることを示している。

2. 日本と朝鮮で導入された共通讃美歌の翻訳過程とその結果の比較

ヘルマン・ゴチェフスキ

日本と朝鮮の洋楽導入史の比較研究をする場合、私が思いついた限り、以下の様な視点が考えられる。

- 1 実際に導入されたプロセスを別々なものとして考えて、その二つのプロセスを比較する視点(西洋の研究で今まで多く見られた視点)
 - 2 西洋音楽がグローバル化するプロセスを一つのプロセスとして捉え、その中に日本と朝鮮の場合の特徴を比較する視点(最近の安田視点)
 - 3 日本と朝鮮の関係史(支配関係、交流関係)の中の一つのプロセスとして捉えること(関庚燦視点)
- 2番目の「グローバル化から観る視点」と3番目の

「両国関係から観る視点」は、様々な歴史事実を考えれば当然に必要な見方である。その二つを考えれば、一番目の「両国の洋楽導入史を別々なプロセスとして観る視点」の存在権に疑問が出るかもしれない。

しかし洋楽受容では歌(賛美歌、唱歌、軍歌、流行歌など)が中心的な役割を果たし、その歌のほとんどは西洋の言語ではなく、それぞれの国の言語で歌われた。そして言葉の発音や韻律と西洋のメロディーとリズムの間に矛盾が生じた。この矛盾を解くことはアジアの近代音楽の発展の一つの動機であった。日本語と朝鮮語の性質がかなり違うので、生じる矛盾が異なり、発展の動機が異なり、従って洋楽導入史のプロセスも別々な流れとして観る必要がある。

この考え方を前提に、私は以前から、同じ歌が日本

と朝鮮で導入されたそれぞれのプロセスと結果の比較に興味を持った。

朝鮮語では音楽のメロディーに当てはめる単位は音節(原則としてハングルで一つの固まりとして書かれる、[子音]+[二重]母音+[子音]から構成される要素)だが、日本語ではモーラ(原則として平仮名で一つの文字を成す単位で、[子音]+短母音から構成される要素)である。それに関しては朝鮮の方法が西洋言語に近い。日本語には一つの単位に含まれる音声情報が少なく、必然的に一つの単語に使われる単位数が多い。例えば英語の賛美歌を翻訳する時に、音の数が変わらないので、日本語で多くの情報が失われるが、朝鮮語ではそれほどの違いが見られない。

	日本語訳 ¹ (1890) :	朝鮮語訳 ² (1894) :
Nearer, my God, to Thee, / nearer to Thee! / E'en though it be a cross / that raiseth me, / still all my song shall be, / nearer, my God, to Thee. (Sarah F. Adams, melody by Lowell Mason)	わがみかみに / ちかづかん / のぼるみちは / じふじかに / ありともなど / かなしむべき (Nearer to my god! Even if the ascending way may be the cross and (I) must grieve.)	우리쥬 갓가히 / 더 갓가히 / 나를 드논 거시 / 괴로워도 / 항상 찬양하네 / 우리쥬 갓가히 (Near to my god, nearer! Even if it may be hard to raise me, I will always chant the praise, near to my god!)

この歌詞では原歌に繰り返しが多いので、日本語訳ではその繰り返しが省略され、さらに still all my song shall be が翻訳されていない。朝鮮語ではほとんどすべての内容が翻訳され、繰り返しもある。

この様に見ると、西洋の歌曲の翻訳においては朝鮮人より日本人が苦勞したと考えられる。しかしもう一つ大きい問題は韻律(言葉のリズム)である。英語には冠詞と前置詞があるので、語句が弱い音節で始まる時が多い。それに対して朝鮮語と日本語には名詞の前に付く助詞がほとんどなく、拍が言葉の始めに当たる場合が非常に多い。この言葉の拍が小節線(音楽の拍)と一致すると歌いやすいので、洋風の歌では言葉の切れ目と小節線が一致するのが日本語と朝鮮語の共通の性質である。ただし弱起で始まるのが多い西洋語をもとに作曲されたメロディーでは音楽的な切れ目が小節線と一致しないのが非常に多い。そういうメロディー

にはもとより日本語や朝鮮語の歌詞がうまく当てはまらない。実際にその場合には歌詞がどの様に付けられるかと言えば、歌詞の発音を無視して音楽的な切れ目を尊重する場合と、音楽的な切れ目を無視して歌詞を発音しやすい様に付けられた場合と、メロディー自体が編曲され、弱起が省略されたり、小節線がずらされたり、リズム全体が変えられたりなど、様々な方法が観察される。

これは述べた通り、日本語と朝鮮語の共通するところだが、細かいところを分析すると違いも見られる。ここで注目したいのは三拍子の扱いに関する違いである。日本人には三拍子の感覚があまりなく、三拍子を歌っても二拍子で叩いている様子がよく知られている。日本人は三拍子の拍を強く感じないので、三拍子のメロディーに歌詞を付けた場合にも言葉の切れ目を小節線と合わせる傾向がほとんど見られない。それに

対して朝鮮の伝統音楽には三拍子が多く、西洋の三拍子も理解しやすかっただろう。

今回は『近代唱歌集成』(注2参照)において日本と朝鮮の唱歌を比較したが、確かに朝鮮の方では三拍子でも二拍子と四拍子と同じように、弱起が避けられている傾向が窺える。

その一例として、The Lord into his garden comes という讃美歌³と、そのメロディーを使った日本の歌2種類と朝鮮の歌1種類⁴ 譜例のように並べて表記した。また、朝鮮語の場合には今日歌われている形式は1922の楽譜とかなり違うので、『近代唱歌集成』に収録された録音とインターネットで見つけた別の録音(出所不明)を印刷されたヴァージョンの下に載せた。歌われたヴァージョンは歌詞の配分と息継ぎだけではなく、メロディーも印刷された楽譜とかなり違っていたのでその違いを小さい音符で示した。小さい音符で符尾が上にあるものは『近代唱歌集成』の録音、下にあるのはインターネットからのヴァージョンである。小さい音符がない箇所では両方のヴァージョンが印刷された音符と同じになっている。息継ぎの箇所はそれぞれのヴァージョンで異なっているので、歌詞のところに示した。

日本語の歌詞では英語の弱起が2小節ごとに見られるのに対して、1922の朝鮮の楽譜ではほとんど全ての弱起が消え、その一部はリズムの変化により小節線へ動かされ、また一部のところではフレーズの切れ目が動かされている。それによってこのメロディーの音楽構造が弱まり、特に1小節、9小節、25小節の対応関係がなくなり、和声進行の力も弱くなっている。この様に音楽を徹底的に言葉の都合に合わせたのは当時の

朝鮮の唱歌にもよく見られる。それに対して今日の歌手たちは音楽の構造を優先にして、メロディーを部分的に元の形に戻している。しかしそれによって歌詞の不都合がいろんなところで目立って、この変化で問題が解決したとは言いがたい。

- 1 讃美歌委員編『新撰讃美歌』1890年、169番。
- 2 《찬양가(讃揚歌)》1894年、81番。安田寛編『原典による近代唱歌集成』原典印影V、9頁より引用。
- 3 この歌と日本への伝来については手代木俊一『讃美歌・聖歌と日本の近代』が詳しい。
- 4 「青年警戒歌」『近代唱歌集』

3. 韓国と日本の伝統音楽に対する教育的、社会的な接近方式の理解—文化の思惟体系という観点で—

趙泳培

1) 伝統音楽に対する両国の現実態はどんなに違うか?

日本と韓国の学校音楽教育の差と社会音楽現象の差を分析して見れば、[西洋音楽様式を教育的に重視する]と言う点と[社会的に大衆音楽が類似する]という点を除けばほとんど共通点がないことを分かる。すなわち韓国は学校教育では 伝統音楽に多い関心を持ってその比重を高めるために努力している一方、社会的では国楽があまり韓国人の日常生活の中に生動していることができないし、一方日本はたとえ学校教育では邦楽をそのように強調していないが、社会的では邦楽が日本人の日常生活の中で相変わらず生きて呼吸する音楽で席を取っていると整理することができる。

2) 日韓両国の文化的な思惟体系はどんなに違うか?

(1) 韓国の文化的な特性

区分	肯定的な性向	否定的な性向
第1の特性	拡大志向のシンミョン性	虚構的な誇張性
第2の特性	包括的な多様性	不変別的な適当性
第3の特性	躍動的な変化性	心忙しい不安定性
第4の特性	感性的な集団性	感情的な排他性

【補遺】 (本冊17pの前に挿入)

「R2 日韓近代音楽の相互関係」より、

「2.日本と朝鮮で導入された共通賛美歌の翻訳過程とその結果の比較」 (ヘルマン・ゴチェフスキ)

譜例 賛美歌 "The Lord into his garden comes" と日本語と朝鮮語による替え歌

orig. 6/8, ♩ ♪ ♫ ...

The Lord in - to his gar - den comes The
か - し - の - の キ ー わ フ - ジ - ヤ - ヌ - ネ か - ミ -

internet (以下同様) 【近代唱歌集成】の整音 (以下同様)

이 풍진 세 - 상 - 을 맛 - 냈 - 스 - 니
이 풍 - 진 - 진 세 - 상 - 을 V 만 - 냈 - 으 - 니 V

5 spi - ces yield their rich per - fumes, The lilies
は - ち - り - の ぶ - け - と - ま ゆ - り - の き -

나 - 의 희 - 망 - 이 무 - 었 - 이 - 나 V 부귀 - 와
나 - 의 의 - 회 - 망 - 이 V 무 - 었 - 이 - 나 V 부 - 귀 - 와

10 grow and thrive 1916(以下同様) The lilies grow and thrive;
は - り - と - び け - い - の り - と - び

영 - 화 - 를 누 - 렸 - 스 - 먼 희 - 망 - 이 죽 - 할 - 가
영 - 화 - 를 V 누 - 렸 - 으 - 먼 희 - 망 - 이 죽 - 할 - 가

16 Re - fresh - ing show'rs of grace di - vine, From Je - sus
リ - っ - ぱ - ら - し - ゃ - の あ - ま - り - の え - ら - き -

푸 - 른 - 하 - 늘 보 - 은 달 아 - 리 - 서 꿈 - V -
푸 - 른 - 하 - 늘 V 밝 - 은 달 아 - 래 - 서 V 꿈 -

22 flow to ev' - ry vine, And make the dead re - vive,
の - き に - か - つ - け - ん 이 - 나 V 세 - 상 만 - 스 - 가 춘 - 몽 -

꿈 - 이 심 - 각 - 중 - 니 V 세 - 상 만 - 사 - 가 춘 - 몽 -
꿈 - 이 의 - 생 - 각 - 하 - 니 V 세 - 상 만 - 사 - 가 춘 - 몽 -

28 And make the dead re - vive. (Boston 1882)
나 - 다시 살 - 리 - 고 나 (明治唱歌 1890)
나 - 다시 살 - 리 - 고 나 (1910/1916)

중 - 에 V 또 - 다 - 시 꿈 - 같 - 구 - 나 (1922)
중 - 에 V 또 - 다 - 시 V 꿈 - 같 - 구 - 나 (『近代唱歌集成』録音)
중 - 에 V 또 - 다 - 시 V 꿈 - 같 - 구 - 나 (internet)

【訂正】

本冊17p 注の4には一部の文字が欠落しています。以下のように訂正します。

4 「青年警戒歌」 『近代唱歌集成』原典印影V、132頁。

(2) 日本の文化的な特性

区分	肯定的な性向	否定的な性向
第1の特性	縮小志向の技芸性	便宜的な軽薄性
第2の特性	節制された慎重性	規格化された硬直性
第3の特性	重層的な統一性	二重的な隠匿性
第4の特性	生存的な集団性	利己的な排他性

3) 伝統音楽に対する教育的、社会的な接近方式が違う理由は何か?

この問いに対する‘一つの正解’はありえない。‘可能性としての解答’があるだけだ。発表者は色々‘可能性としての解答’中で先立ってよく見た両国の文化的な思惟体系と係わってこれを論議して見ようとする。

(1) 韓国の場合：学校での国楽教育の強化と社会での国楽の分離現象

変化を拡大志向しようと思う韓国文化の性格を勘案すれば、国楽教育の果敢な比重拡大を易しく理解することができる。韓国文化は一種の‘Plus 的な文化’の性格を持っている。それで多くの歴史的な背景によって洋楽一辺倒の音楽教育がしばらく定着されていたが、韓国文化の思惟体系の特性の上、新しいの(国楽もしばらく疎いことのように認識)を追加するのに果敢なことがあったと思う。

勿論‘私たちは良いことよ!’という感性的な集団意識の発露で、国楽教育が強化された面があるが、拡大志向性、新しいことの導入に対する果敢性、躍動的な変化性などが肯定的に作用して国楽教育を学校教育に積極的に取り入れて、その比重を拡大志向しようとするのに荒さがなくなったことと判断される。

(2) 日本の場合：学校での邦楽教育の慎重と社会での邦楽の積極的な活用性向

日本のこのような性向の背景にも‘脱亜入欧’という日本社会の文化的な伝統とまたナショナリズムの復活に対する警戒心などが邦楽教育の比重を高めるのに慎重する理由とすることもできる。しかし文化的な観点で見れば、日本の学校教育で邦楽を縮小して邦楽の拡大に慎重すること、それにもかかわらず日本社会の中で邦楽が生活音楽で相変らず席を取っ

ていることは日本の文化的な思惟体系の影響ともできる。日本の縮小志向の文化的な性向はどんな仕事を決めるにおいてネガティブした要素たちを最小化しようとする傾向があると思う。その結果、新しい挑戦と変化に挑発的に果敢に応じなくなる。だから邦楽の教育的な大切さが認められると言っても邦楽教育の強化が持つて来る他の問題点によりもっと慎重になるしかないのだ。

このような日本の現象は、躍動的な変化に慣れた韓国文化の観点で見れば、もしかしたら息苦しく思われることもできる。しかし日本文化の観点で見れば、それは非常に適切なものなる。

4) 日韓両国で予見される問題点は何か?

韓国の国楽教育と係わって予見になる問題点は次のように整理することができる。

(1) 国楽の強調、国歌の強調、日本音楽に対する排他、他の様式への消極性などが度が外れればナショナリズム的な教育、あるいは他の様式の音楽に対して排他的になる可能性がある。

(2) 大衆音楽に対する消極性は高級音楽と大衆音楽という二分法的な観点を強化する恐れがある。

学校教育としての国楽の強調が社会現象としての国楽の生活化と繋がれなければ、国楽教育の意味ある活性化を期待しにくくなるでしょう。

日本の邦楽教育と係わって予見になる問題点は次のように整理することができる。

(1) 邦楽教育に慎重な姿勢、国歌教育に消極的な姿勢などはナショナリズム的な教育を止揚する効果があるが、それが度が外れる場合、自文化中心性が揺れる可能性がある(もちろん日本は邦楽の社会的な密着でこれを補完とあるが)。

(2) 世界の多様な音楽様式、大衆音楽様式などの導入は望ましいと言えるが、邦楽教育より他の音楽様式にとらわれすぎたら、音楽教育の求心力を喪失する可能性がある。

(3) 学校の邦楽教育はその比重が低い、社会現象としての邦楽が日本人たちの日常生活と密着される現象が持続したら、徐々に学校教育としての邦楽教育の大切さはその席を失うようになるでしょう。またそのようになれば教育的な効率性を極大化して‘質的な卓越性が引き立つ邦楽の社会化’よりは社会的な自律性による‘邦楽の量的一般化’で邦楽の位置が固着される可能性が高い。

5) 問題点の解決のためにお互いに補う必要がある事項は何か?

(1) 地球村時代と文化多様性の時代にふさわしく、自国の伝統音楽様式の教育的な比重をすぎるほど高めるのに泥んではいけない。しかし‘求心力としての主体的文化’は必要だから、自国音楽をかなり多い比重で扱う必要はある。こんな観点で見れば、韓国の場合7次教育課程より国楽の比重をもっと高めようという主張があるのに、このような主張はともすれば国粹的で閉鎖的な音楽教育で流れる可能性が高くなる。一方日本の場合、邦楽の比重を高めるのに慎重であるが、しかし文化的求心力のために邦楽の教育的比重を今より相当部分引き上げる必要があると思う。

(2) 代わりに両国は世界の多様な音楽様式に関心を持って、その教育的比重を引き上げる努力をしなければならない。韓国の場合、洋楽と国楽ジャンルの音楽だけいっばいと、世界の多様な文化圏の音楽は極めて制限的に扱われているのに、児童の発達段階を勘案してもこのような教育課程は少なくとも世界化時代にふさわしい教育課程だと言うことは難しいだろう。日本の場合も韓国に比べてちょっとたくさん扱っているとはするが、これからもっと世界の多様な音楽素材をふやす必要があると思う。

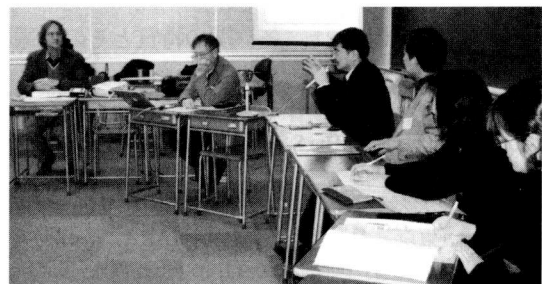
(3) 教育は未来指向的な人間活動だ。したがって多様な音楽様式たちの壁を創造的に崩して新しく 創出

するのに積極的ではなければならない。それぞれの様式が共存しながらもお互いにとって新しい創出としていわゆるフュージョン音楽を作り出す能動的な教育活動が強化される必要があると思う。

(4) そして日本と韓国の両国はお互いの音楽様式たちに対して開放的ではなければならない。日本も韓国音楽の教育的な受容を今よりもちょっとたくさんしたらと思う、韓国の場合には日本音楽に対する排他性を早く捨てて、日本音楽の教育的な導入に積極的に出たらと思う。相変らず‘過去の荷物’に押されてお互いに排他するには 21 世紀という地球村的な文化の荒波がとても高いからだ。開放と疎通を強調する 21 世紀に両国はそれぞれの伝統音楽素材を積極的ながら能動的に活用することで両国理解の道を広げることと同時に新しい文化創出をはかるのに一緒に努力したらと思う。

(5) 韓国と日本はそれぞれ社会音楽と学校音楽がお互いに一致しない現象を持っている。日本は邦楽教育の比重が低い邦楽の社会的実用は高く、韓国はこれと反対に国楽教育の比重は高いが国楽の社会的実用は低い。このような不一致を解消するために学界はもちろん文化界、言論放送界でみんな出る必要があると思う。特に国家の文化政策と係わって社会音楽現象が歪曲されないながらも自国音楽が他の音楽たちとともに日常生活の中に生きて呼吸するように誘導されなければならないでしょう。

21 世紀は‘文化戦争時代’ではなく、‘多様な文化の共存と新しい融合の時代’でなければならない。だから多様な文化の共存と新しい創出のための出会いは多いほど良い。今後とも日韓両国がお互いの差を尊重しながらもその多様性の共存のためにもっと多い交流をする必要があると思う。



第9回日本音楽教育学会ゼミナール：日韓合同ゼミナール報告書
日韓両国の音楽教育の理論と実践
—伝統音楽に着目して—

発 行 日 2008年6月30日
編集兼発行人 日本音楽教育学会日韓合同ゼミナール実行委員会
事 務 局 〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱26号
Tel.042-381-3562 Fax.042-381-3562
e-mail: onkyoiku@remus.dti.ne.jp
発 行 所 昭和印刷株式会社
〒700-0941 岡山市豊成3-1-27
Tel. 086-264-6110
Fax.086-262-5096